

4. 日吉新宮名称の由緒

「当院草創由緒、

日吉新宮山王権現鎮座の由緒」

影向山神護寺善學院

【原文】

弘仁八年、当山草庵ニ善深和尚と申僧住居有之候、然る処、領主安八大夫と申仁、傳教大師奉請に付、一寺建立有之候、則今の善学院客殿是なり、秋八月の頃、奉召請候処、当山は水土至て清淨にして靈地なればとて、大師自山王御神躰の内、大宮・二之宮・聖眞子・十禪師、右四躰僧形躰に大師御壽五十一才の御時御彫刻被為遊、坂本日吉山王権現を御移被遊、当所を小比叡の里と御名付、宮居を日吉新宮と御称し被遊候、依之山王の鐘の銘等日吉新宮と記し御座候、大師御所棲の節、山王の神、日々御影向御座候に付、寺山号大師被爲思召、影向山神護寺と御名附被遊供趣、神宮桶等に悉く書附御座候

【読み】

弘仁八年、当山草庵に善深和尚と申す僧住居之有り候、然る処、領主安八大夫と申す仁、伝教大師奏請に付き、一寺建立之有り候、則今の善学院客殿是なり、秋八月の頃、召請奉り候処、当出は水土至りて清淨にして靈地なればとて、大師山王御神躰の内より、大宮・二之宮・聖眞子・十禪師、右四躰僧形體に、大師御壽五十一才の御時、御彫刻為し遊ばされ、坂本日吉山王権現を御移し遊ばされ、当所を小比叡の里と御名付け、宮居を日吉新宮と御称し遊ばされ候、之に依りて山王の鐘の銘等日吉新宮と記し御座候、大師御所棲の節、山王の神、日々御影向御座候に付き、寺の山号大師思し召し為され、影向山神護寺と御名付け遊ばされ、神宮桶等に悉く書き付け御座候

【語彙解説】

弘仁八年=817 伝教大師=786~822
影向=神仏が仮の姿をとって現れること。神仏の来臨。

【現代文】

弘仁八年、当寺の草庵に善深和尚という僧が住んでいました。すると、この地の領主である安八大夫という人が、伝教大師をお招きしたいということで一寺を建てました。それが今の善学院の客殿です。秋八月の頃、伝教大師をお招きしたところ、当寺は自然が極めて清淨で靈地であるというので、大師は日吉山王の御神躰の内から、大宮・二之宮・聖眞子・十禪師の四体を僧侶の形で、大師がお年五十一才の時、彫刻され、坂本の日吉山王権現を勧請され、当地を小比叡の里と名付け、神社を日吉新宮と称されました。このために山王にある鐘の銘などに日吉新宮と記してあるのです。大師がご滞在の時、日吉山王の神が毎日現れ出たので、大師は寺の山号を考えて、影向山神護寺と名付けられ、日吉神宮の桶などにすべてその寺号が書き付けてあるのです。



日吉新宮
執行探題前大僧正豪恕書

神輿殿に掲げた扁額 表面



同扁額 裏面

【原文】

探題前大僧正守節尊師也者山門碩學也而教觀兼備顯蜜並修且工手換鵝之法也蓋弘法大師飛錫唐土歸朝之後傳諸弟子雖宗異乎展轉傳於尊師今茲文化六年己巳之春故詣於當社當社也者傳教大師之所草創也於是吾黨諸修大般若經焉輿駕道於草堂砍茲碑扁於當社而諸筆之調書日吉新宮四字矣宛如雲煙之起實可謂千載奇觀哉休不勝杵欣而乃刊之以獻之文化六年己巳之春三月

高橋兼吉撰
高橋直吉書
工 石崎源兵衛
鐫 太田八左衛門

【読み】

探題前の大僧正守節尊師なる者は山門の碩学なり。教観兼備し、顕密並修して且つ工手換鵝の法たり。蓋し弘法大師唐土に飛錫して帰朝の後、諸弟子に伝う。宗異なるも、展転して尊師に伝う。今茲文化六年己巳の春、故ありて当社に詣づ。当社なる者は以て伝教大師の草創せる所なり。是に於いて吾が党は大般若経を諸修す。輿駕もて草堂に道す。茲の碑を欣り、当社に扁せんとし、諸筆を之れ調え日吉新宮の四字を書す。宛として雲煙の起つ如く、実に千載の奇観と謂う可きかな。休びて杵欣するに勝えず、而して乃ち之を刊して以て之を献ず。文化六年己巳の春三月

高橋栞吉 撰(詩文を作る)
高橋直吉 書

工(大工) 石崎源兵衛
鐫(ほる) 太田八左衛門

【現代文】

探題の前の大僧正守節尊師は延暦寺のすぐれた学僧です。教観を兼ね備え、顕教密教とともに修め、かつ書の大変な名手でした。弘法大師が唐の各地を行脚して日本に帰国した後、学んだことを弟子達に伝えました。大僧正は宗派は真言宗・天台宗と異なっていたが、その書法は回り廻って彼まで伝わりました。今年文化六年の春、彼はゆえあつて当社に参詣することとなりました。当神社は伝教大師がお創りになつたものです。そこで、私たちは大般若経を修めることにしました。大僧正が善学院にお出でになりました。そこで碑文をきざみ、当神社に掲げようと思ひ、筆を整え、「日吉新宮」の四字を書いていただきました。それは、まるで雲や煙が沸き立つようで、まれに見るすばらしいものでした。まことに喜びに堪えません。そこで、その由来を刻んで奉納する次第です。

【語彙解説】

探題 寺院で經典を論議するとき、論題を選定し、問答後にその論旨の可否を評定する役僧
守節大僧正 = 1732~1824。天台宗の高僧。豪怒(ゴウジヨ)の号。近江松尾の生。寛政七年(1795)莊嚴院僧正、その後比叡山正覚寺第二十世の法灯を継ぐ
山門 比叡山延暦寺 碩学 大学者
教観 教相と観心の二門。教相は宗門の理論・教義、観心はその実践
換鵝 王羲之の故事。ここでは中国一の書の名手とされる王羲之をさす
法 模範
飛錫 僧が各地を巡遊すること
帰朝 日本に帰る
展転 輾転。次々と移っていくこと
今茲 今年
草創 寺院を始めて建立すること
吾党 わが仲間。わが郷党
修 ならう 輿駕 乗り物
欣 きる 扁 かける
宛 まるで 刊 きざむ
杵欣 不明
文化六年 己巳 = 1809年